

◇事例紹介◇

ベテラン酪農家を訪ねて

牧野勉氏の経営

県普及教育課専技 栗山光春

工業の発達とともに、国民の生活水準は年を追って上昇し、文化生活を楽しく人々が多くなったなかで、ひとり農業だけ取り残されたような感じがあるが、それにも負けず創意と工夫、熱烈な研究意欲をもって酪農経営を儲かるものとし、地区の模範となって日夜活躍されている方は県下にも数多くおられる。今月はそのうちの1人として皆さんもよく御承知の方が多いたと思うが、長船町の牧野勉さんの経営ぶりを紹介することも、あながち無駄ではないと思うし、特にその飼料自給の面から内容をうかがって皆さんのご参考に供したい。

牧野さんが乳牛を飼い始めたのは、戦時中の昭和17年からというから、もう20年以上のベテランである。お宅は、赤穂線長船駅の南東約600米、徒歩5分という所で、一帯は水田単作地帯である。当初乳牛を導入した動機は水田の地力増強と酪農収入をねらった事は当然であるが、戦時中食糧増産が叫ばれていた当時にも拘わらず飼料自給の重要性を認識し、強い作付統制の中で飼料作物の試作研究に努力されたというから、まことに敬服に値するものがある。この考えが根底となり、今日の健全経営が築き上げられたといっても過言ではなからう。現在の飼養頭数は搾乳牛6頭、育成牛2頭であるが、実のところ多頭化に踏み切ったのは昭和35年からであるといわれる。それは長男の将来を決するに当り、後継者として酪農大学に入学することを本人が承知されたからである。

経営状況は第1表のとおりで、水田約2・2haの内牛舎に近い30aを飼料専用圃として田畑転換し、又牛舎に隣接する水田約3aを運動場として本冬完成した。飼料作付の主体は水田うら作であるが、その67%を使用している。牧野氏の計画では、昭和40

年度には搾乳牛7頭、育成牛3頭の合計10頭とし、1頭の平均搾乳量5,600kg(約30石)水稻を180aに減らし、転換畑を10a増して計40aとし、水田うら作による飼料作を180aの内170a(94%)に増やして自給飼料を確保するという。

その飼料作物作付の実態は第2表のとおりであるが、水田うら作129aのうち、84aのイタリアングラスが乾草用として主体をなし、35aのイタリアンライグラスとれんげの混播が乾草並びに埋草用として、何れも10月上旬稲間に中播きされその10a当り生草収量は7,000~6,300kgが確保されている。その外10aの青刈えん麦とイタリアンライグラスの混播が稲刈後耕起播きされて1月上旬から順次刈取り、生草として給与される。

飼料作付体系

転換畑30aは、作付体系が大きく3つに分けられる。即ち第1型は14aの青刈えん麦-テオシント型で、互いに播種は、前作の畦間に播く形となり、土地の利用度を高くし、テオシントの初期生育が遅れるのを補っている。第2型は青刈えん麦-つるとり甘藷型で、つるとり甘藷は7aの内、半分は5月上旬にあらかじめ育苗された後俵型式の種いもが定植され、残り半分には種いもが直播きされる。こうすると、6月下旬から定植の方が刈取りを始められ、それが刈終ると直播きした分に刈取りが引き続いて

育搾計成乳牛			総計	畑		水田(A)	耕地面積
八頭	二頭	六頭		合計(B)	普通畑		
八頭	二頭	六頭	二三〇a	三七七a	七〇a	一九三a	作目別作付面積
			畑	田水			
			①野菜	②飼料作物(D)	③飼料作物(C)	④麦・菜種	水稲
九二a	二a	三五a	六七%	二二九a	六四a	一九三a	

第一表 経営概況 (昭和三十八年度)

岡山畜産便り 1964.04

移れて、刈り終る頃には、前の定植した分の2番刈りが始まる形となり、以後1ヵ月毎に3番刈、4番刈と続き、10月一っばい毎日一定量、1頭当り約15kgのものが給与できている。第3型は、最も普及している型の青刈とうもろこし-家畜かぶ-青刈えん麦型で、青刈とうもろこしは3回播種を行い、4月上旬播きは田植時期の青刈用として利用される。

以上転換畑は夏作を主体にして作付された典型的な青刈型であるが、その省力対策として播種時には、耕転機が高度に利用され、肥料も牛尿が主体となって、随時尿溜よりホースによって畦間に散布され、牛尿に強いデオシントに対しては生地そのまま施用によって除草の効果もあげている。ただ問題は刈取り

労力であるが、テオシント、つるとり甘藷の両者は、その機械化が不可能であるが、現在は青刈とうもろこしと共に10a当り収量が最も高い作物であり、多頭化しても、小面積で間に合うことと、牛舎に隣接した圃場に作付けしているので、刈取、運搬労力はさして問題でないという。

その他、普通畑37aのうち牧草に2a、えん麦と甘藷の自家用採種圃が3aを使用し、又畦畔草が延15a分ある。

以上の作付形態からわかるように、生草としては6月中旬から10月一っばいまでは青刈とうもろこし、つるとり甘藷、テオシントの3者をうまく組合せ、11月下旬から6月までは、テオシントの間作に青刈えん麦の前進と岡山黒との混播、水田うら作中播きのイタリアンライグラスと青刈えん麦の混播、又転換畑の家畜かぶ、青刈えん麦等を利用し、それにイタリアンライグラスとれんげのサイレージを加用し

第2表 飼料作物作付状況 (昭和38年度)

地目	作物名	播種	収穫	面積		反収	総収量	仕向別
				実	延			
水田うら作 (129a)	イタリアン れんげ+	10月 旬上	3下, 4下, 6上	84	84	7,000	58,800	乾草
	イタリアン 青刈えん麦+	10月 旬上	4中, 6上	35	35	6,375	22,313	乾草 10,313Kg 埋草 12,000
	イタリアン	10月 旬下	11上, 3中, 4中, 5中, 6中	10	10	9,375	9,375	生草
転換畑	青刈えん麦 テオシント	9月 旬中	11下, 3上, 4下, 6上, 7下, 8下, 9中, 10中	14	14	11,250	15,750	"
	青刈えん麦 つるとり甘藷 いも	10月 旬中	4下, 6下, 7中, 8中, 9中, 10中, 10下	7	7	3,750	2,675	"
畑 (30a)	青刈とうもろこし	4月 旬上	6中		27	3,750	10,125	"
		6月 旬下	8上		9	6,375	5,738	"
		8月 旬上	9中	9	9	4,388	3,949	"
	家畜かぶ 青刈えん麦	9月 旬中	11下~3中	9	9	6,375	5,738	"
畑 (5a)	ラジノ+ イタリアン えん麦+甘藷	9月 旬中	11下, 12下, 4上, 5上, 6上, 8上, 10上(イモ)	2	2	15,000	3,000	"
		6月 旬中	3中, 4下, 6上	3	3	6,750	2,025	"
(15a)	畦畔草			15	15	3,750	4,125	生草 1,125Kg 乾草 3,000
合計				179	236		168,912	生草 72,113 乾草 84,799 埋草 12,000

第三表 飼料自給状況

二三六a	延面積	飼料作延面積		一頭当	生産量	飼料総生産量		一頭当	D・C・P	T・D・N	自給率
		一頭当	生産量			一頭当	生産量				
三四a											
一六九t											
二四t											
一二六%											
七七%											

第四表 乳代に対する購入飼料費 (昭和三七年度)

頭数	搾乳		率脂乳	総額	販売代金	購入飼料費	F/M
	頭数	搾乳量					
二、三、六Kg	総量	搾乳量					
六、四元Kg	一頭当	量					
三、六%							
八元、六元							
二元、七元							
三、三元							
三%							

岡山畜産便り 1964.04

ている。水田うら作のイタリアンライグラスはほとんどが乾草として調製されているが、乾草の準備量は1頭当り約 2,000kg に及び、年間を通じて給与されていることが、後に述べる高能力の乳牛を1年1産の線に維持するコツともなっているのではなからうか。

次に以上の飼料作物の作付状況から飼料自給の程度をみると第3表のとおりで、第4表のような高能力牛でありながら、極めて高い飼料自給度であることがわかる。またFM率をみても、24%程度にしかならず、これも標準より極めて低い。しかも第4表にみるとおり、その乳牛の能力が平均 6,419kg (約 34石)、乳脂率3・8%、乳代が1頭当り 20万円を上廻るといふ高能力牛を揃えていることによって粗収入を大きくし、又自給度も高いため、その所得率も高いものとなる。

経営全体の収支をみると、次の第5表のとおりで、総粗収入 182 万円、経営費 33 万円で差引約 150 万円の粗収益となっている。如何に儲かる。しかも健全な農業経営であるかがうかがい知られよう。

いま牧野さんは、昭和 40 年度の目標として既に一部を述べたが、搾乳牛7頭より酪農収入 141 万円、米収入 81 万円計 222 万円とし、所得率を酪農 50%米 65%とみて、純収益を 123 万円とするべく、着々計画を実行されているが、その実現は夢ではなく、これだけ基礎が固まっているだけに、容易に達成されることであろう。

以上その概要を紹介したが、今日までの姿になったのも、牧野さんの人一倍の研究心と克明な記録による反省と改善、新技術の率先導入、乳牛に対する愛畜心、家族一丸となつての経営意欲、これらがあったればこそこのことと深く敬意を表するものである。とかく乳価が安く飼料が高いと不平を洩らす酪農家が多いが、これらも無理もない事ではあろうが、まず自分の経営をふり返ってみる必要があるのではなからうか。

〇おしらせ〇

家畜人工授精講習会

県畜産課では家畜改良増殖法に基づく家畜人工授精講習会を次の要領で行ないます。

- 期日 昭和 39 年 5 月 11 日から 5 月 20 日まで
- 場所 津山市大田 岡山県酪農試験場
- 家畜の種類 牛
- 受講者数 30 名
- 受講手続

受講願(別に定める)に履歴書および戸籍抄本を添えて農林事務所へ提出すること。

なお、書類は県畜産課へ4月15日までに到着するように提出すること。また提出書類中、他の種類の家畜人工授精師の免許を持っている者は、その免許写も提出することとなっているので注意のこと。

第五表 経営収支概算 (昭和三十七年度)

粗収入				経営費			
項目	金額	比率	項目	金額	比率		
計	1,820,000円	100%	計	330,000円	100%		
養	1,000,000	55%	飼料費	100,000	30%		
麥	300,000	17%	肥料費	50,000	15%		
米	117,000	6%	雇労働賃	30,000	9%		
酪農	413,000	23%	其他雑費	50,000	15%		